

# しごき

第50号

特集：三重県における野鳥の会の歩み



2006年4月

日本野鳥の会  
三重県支部



## 特集：三重県における野鳥の会の歩み

### 特集にあたって

日本野鳥の会三重県支部の支部報「しろちどり」は今回記念すべき50号を迎えました。この節目にこれまでの会の歴史を振り返りたいと思います。また、支部会員の撮影した野鳥の写真をカラーで掲載します。力作をお楽しみください。  
(編集部)

### 「しろちどり」の発刊50号を祝して

日本野鳥の会三重県支部 支部長 杉浦邦彦

日本野鳥の会三重県支部(1993.3.5)が産声をあげてから12年余りとなり、会員が自由に投稿できる機関誌「しろちどり」は第50号という記念特集号となりました。

## 目次

表紙の言葉	2
特集にあたって	2
「しろちどり」の発刊50号を祝して	2
「しろちどり」創刊号について	6
「しろちどり」50号記念座談会	7
今日も鳥日和	13
しろちどり50号記念	
アートギャラリー(1)	14
特別寄稿	
三重県上野盆地における溜め池の	
魚類相	16
野鳥記録	22
支部活動のページ	
支部活動の記録	22
密猟パトロール報告	22
鳥羽行者山に建設予定の	
大型風車について	23
探鳥会報告	24
会員のページ	27
しろちどり50号記念	
アートギャラリー(2)	28
編集後記	28

振り返ってみると、財団法人日本野鳥の会の支部として承認されたのは、全国で第82番目であり決して早いとはいえません。当時は全国的に「自然保護思想」が進み、人が自然を保護するのではなく、人以外の生物を支配し畏敬の念を持たないのはもってのほか・・・とあって「自然との共生」という言葉が登場する時代でした。今、当時の機関誌を見るとたいへん幼稚で、単なる探鳥会の記録ばかりでした。人の文化は自然とどう接したらよいか問われる時私たちは絶えずそのジレンマに陥ることがよくありました。いまでは若人が中心となり、生物の多様性の維持や、個々の生態系の保全をどうしたらよいかという難しい目的に向かってなんとか主題を掴み、野鳥を中心にしてグローバルに周辺の環境との係わりを究明し、機関誌に発表しているのをみるとその成長振りには感激を覚えます。

ところで、これまでに至る前段があることは知る人ぞ知る、です。「しろちどり」創刊号にも簡単に述べましたが改めて紹介しましょう。

私が三重県をなんとなく知る(1951年)ようになり、今も印象深いのは文科系学問の盛んな土地柄であるということでした。それは自然科学分野の一般化した任意団体があるのに気づかなかったからです。昭和天皇が日本の復興のために全国を巡幸(1950年)され、三重県をご訪問されたのを期に、三重県が企画し県立大学水

## 表紙の言葉

ヒヨドリ

杉原 豊(伊勢市)

お正月の日差しの中、最後まで残った赤い実に一羽のヒヨドリが来ていました。

町でも山でも、やさしくヒーヨ、ヒーヨ、時にはギャーギャーわめき散らし、いつも、そばにいるお隣さん。私の好きな鳥です。



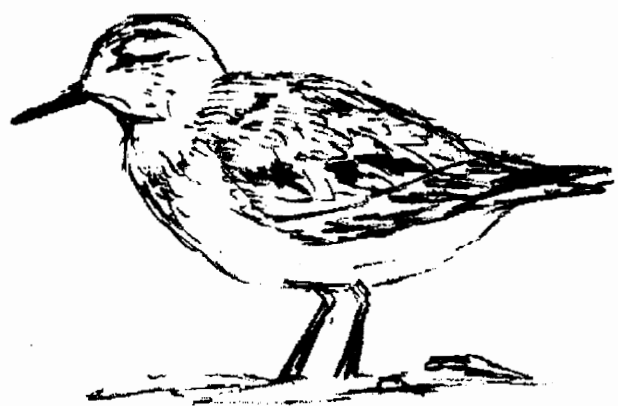
産学部長の岡田弥一郎博士を中心に、県内の動植物専門家（三重大学大町文衛教授、矢頭献一助教授、山下善平助教授他）によって三重県産生物目録が発刊（1951年）されました。それと同時にその時に収集された標本を中心として三重県立博物館が建設されました。この時は主に分類学が中心でいずれの分野においても学究肌の人達で構成され、唯一、昆虫談話会が庶民的でした。しかし、昆虫は分野が広く主に生息を確認することで、分類の域を出ませんでした。このような状況で一般庶民の活動ができるグループの結成は遅れていました。

そこで登場したのが「三重野鳥の会」でした。自然科学の発展にご熱心だった三重大学農学部の山下善平教授（当時）のご好意によって昆虫学研究室の一室をお借りし1971年5月8日、愛鳥週間の二日前の設立でした。会長に瀬古正輝をはじめ有志の佐藤恵美、佐脇政則、杉浦邦彦、樋口行雄、山口久和、（欠席：市川雄二）が集い、簡単な会則と一般の年会費300円、学生100円と年間活動として例会4回、探鳥会3回、機関誌「あおさぎ」年1回の発行を決め、午後からは安濃川河口で第1回の探鳥会（シギ・チドリの観察）を実施したのです。忘れられないのは例会が平日の夜7時から9時で、津駅前三重県護国神社（村田一明宮司）のご理解ある応援で部屋を無償でお貸しいだいたことでした。しかし、平日の夜間ということで参加者が少なく、自然消滅しました。参加者は必ず5分間は発言するという条件が負担になったのかもしれませんが。当時の探鳥会は現在のように自家用車が普及しておらず、交通便利な場所が中心でした。したがって必然的に毎回同じ場所になり、マンネリ化し自然に参加者が少なくなり家族、縁者に宣伝のサクラになってもらうことも幾度かありました。ただし、年に一回だけ行った一泊の探鳥会は盛況でした。その中でも三重大学演習林へ足を運んだ探鳥会は今でも一番印象深く残っています。当時の国鉄松阪駅の名松線ホームで列車を待っている時のことでした。「野鳥の会って一体何をすんや？山へ行って野鳥を捕って食うんか？」と一人の中年男性に声をかけられ一同は啞然として声も出さず顔を見合わせ

ました。やっとの思いで「野鳥を静かにじっと見ていたり、鳴き声を聞いて楽しんだりするだけだよ。」というと、すかさず「そんな会ならつまらない！」と吐き捨てるように問いかけた人は立ち去ったことでした。

探鳥会は頑張ってなんとか年3回を維持し、1974年頃にはやっとなんと28名の会員となったのでした。機関誌は自然保護を中心とした内容の濃いものが多いようでした。一方社会では少しずつ自然保護思想の普及が深まり、林業篤志家の諸戸民和氏（故人）から財政上の援助話をされたこともありましたが、私としては意志を同じにした会員が少なくは、いくら財政上豊かでも休眠状態の会では援助された人に申し訳がないと思い、会が成長するまで待っていただくようお願いしました。（内心は非常に残念でした。）1979年には名前だけの会長にして欲しいと言われた瀬古正輝氏が他界され、三重野鳥の会はまさにどん底でした。当時、発起人だった樋口氏は、勤務先を突然退職され、会は宙に浮いてしまいました。折角立ち上がった会を消滅させるのは残念です。歯を食いしばって維持するのに必死でした。その時、会の発足当初にお世話になった山下教授から「お前が世話をし会長となってやれ」と励まされ、やむなく会長を引き受けました。

一方、社会は第一次オイルショック以来、世界の自然をみる意識は大きく変化しはじめ、日



ミュビシギ



## 特集：三重県における野鳥の会の歩み

本にもその兆しは見え始めました。そんなとき、NHK津放送局や朝日新聞津支局、中日新聞津支局では地方版にご好意で探鳥会の案内や時々野鳥に係わる取材を積極的にしてくださったことが続き、急速に会員が増え60余名の会員となったのでした。この頃は諸物価の昂騰が続き経済のバブルが始まったのです。やむを得ず会費を2000円(1978年)としたが、お陰様で会員の減少の心配はなく、この頃は年1回の例会と10回ほどの探鳥会が続けられました。

1981年には満10周年記念誌の発行や三重県生活環境部主催の動物愛護週間に鈴鹿サーキット会場ではじめて野鳥写真展を開きました。また「動物愛護の思想普及と高揚を行い、野鳥研究に寄与した功労」によって三重県から三重野鳥の会が表彰され、さらに1983年には「野鳥の調査研究に取り組み、県下の自然科学に貢献した」として三重県教育委員会から文化奨励賞と副賞10万円を授与され、会の財政を潤すことができました。この頃から大いに活躍して下さったのが、木村裕之、京子ご夫妻であり、影の応援者として鹿島素子夫人は無償で事務所を提供して下さい、今でも北勢地区が利用しています。

この頃の会員はさらに増加し、国の特別調査や三重県からの委託調査、全国の一斉シギ・チドリ調査、ガンカモ調査、サシバの渡り調査、1978年第2回自然環境保全基礎調査(繁殖地図

調査)、1984年第3回自然環境保全基礎調査(冬鳥調査)、1990年第4回自然環境保全調査(サギ・コアジサシなどの集団繁殖地調査)などには積極的に参加し、どうやら全国で三重県内が未調査区域となることがさげられました。しかし調査員は依然として不足気味でした。当時賛同され、調査に協力された会員のご努力があったのだと感謝を新たにしています。

環境庁・三重県・日本鳥類保護連盟主催の第40回愛鳥週間全国野鳥保護のつどい(1986年5月11日)が員弁郡大安町と三重郡菟野町で開催されました。それに先がけて木村京子女史の発案で1985年2月から「あおさぎ通信」の第1号が会員の気楽な連絡誌として登場(2・10頁)し、年6回、第32号(平成3年2月)となって肩の凝らない会員の唯一の読み物として親しまれました。(これは投稿が少なく、機関誌の発行が続けられなくなった苦肉の策でした)。

第40回全国愛鳥週間全国野鳥保護のつどいが行われた後、三重県内ではそれを嘲笑うかのように大規模開発が計画されたり実行されたりしました。例えば、津市納所町に計画された市街地西のゴルフ場建設でした。これは地元会員濱田稔氏(「しろちどり」の題字提供者)をはじめ建設反対の連係プレイで中止となりました。安濃川河口では天然記念物のコクガン射殺事件(1989年)でした。毎年厳寒の安濃川探鳥会は、

二度とこのような事件が発生しないことを念じているのです。お陰でコクガンは今でも姿を見せます。このような経過を経て、納所町を含む津市周辺の広大な中勢銃猟禁止区域(約7,000ha)となり、市街地の貴重な鳥類生息地となっています。これに端を発し、津市立誠小学校が総合学習の一端で鳥類や環境に関心を持ち、保護者を巻き込み、安濃川の掃除にまで発展したことはうれしい体験で、長く続くとよいと思っています。

サギ類の集団繁殖地が全国的に姿を消しつつある中で、鈴鹿市石垣池の「中の島」と西側のマツ林は市街地にあるサギ類の繁殖地のひとつでした。その後、石垣池でカワウの巣が45巣も市川雄二



ヘラサギ



副支部長によって発見（1977年）され、全国で8番目の繁殖地となったのでした。〔現在では全国的に増殖し、困っていますが・・・〕（当時カワウは絶滅するのではないかと考えられたほど貴重な種でした。その後、何故か全国で爆発的に増加し、今では駆除しなければならないほどになってしまいました。＝編集部）そんな中で石垣池西側のマツ枯れが始まると、中の島を遊園地に開発する工事が市によって強行されたのでした。市川雄二氏が中心となって反対の意見書を提出しました。しかし、市はそれを無視していましたが、最終的には島へ渡る橋の建設と遊園地は中止され、現状のままとなりました。中の島にある妙な形の擬木はその時建設されたものです。市川氏のご苦勞されたお陰で、現在の中島はカワウ、サギの生息繁殖地として残り、冬鳥の渡来地となっています。当時の三重県内のカワウは宮川沿岸中流部の粟生頭首工で約50羽が生息繁殖〔1972年頃〕し、珍しかったのです。何故か6月頃に繁殖行動を始める集団でしたが、コロニー上部で開発が起こり、群れは分散し消滅しました。

また、河芸町の田中川河口兩岸の干潟ではビッグプロジェクトが起こり（1989年）ました。

380艘のクルーザーを収容するヨットハーバーや、人工スケート、テニスコート、プールの建設でした。ここは武田恵世会員が科学的データを収集し、絶えず役場へ抗議され、現在の右岸干潟だけが残りました。貴重な生態系としても残されたこの地は地元漁業者も理解され、県鳥のシロチドリが繁殖する地になっていま

す。さらに、財団法人日本野鳥の会〔1980年〕が中心となり、全国のタカ渡り調査をしました。その時、伊勢市在住の吉居瑞穂会員宅の上空がサシバの移動ルートのひとつであることが判明しました。このサシバの渡りの様子は吉居夫妻をはじめとする支部会員で詳しく調査され、その結果はストリックスに発表されました。南勢地区の会員はこのときの技術を生かし「宮川河口の鳥類調査報告」（2002年）を発表しました。このように会員が活動しているのは、現在役員を退かれて他でも活動されている木村裕之、京子会員の献身的な会の運営にかかわられたことによるものです。

話題をもとに戻しましょう。

三重野鳥の会は設立以来満20年を迎えたのを記念して財団法人日本野鳥の会の傘下になる手続きをしたのでした。1971年頃だったと記憶していますが、財団法人日本野鳥の会は財団法人鳥類保護連盟の中にあつて独立したばかりで会員数や支部も少なく、貧弱で、いつ分解するかわからない状態のときでした。財団法人日本野鳥の会理事の市田氏が松阪に来られ、支部の設立を要請されました。当時、支部になる条件は会員50名以上であつたのが、それ以下でもよいとのことでした。しかし、三重野鳥の会も会員が少なく「会」としての存続さえおぼつかない状況でした。そこで力のつくまで待つてもらうことにしました。そんな約束どおり、財団法人日本野鳥の会三重県支部（1993年3月5日）として認可され、総会で会員の了承を得ることができ、現在に至っています。一時は会員数が減少し、会員の顔

も半数ほど変わりましたが、現在では若人達の活躍で機関誌の内容は充実し、他の支部に引けを取ることもなく、他の支部会員の方々からお褒めの言葉をいただくことが多



福島潟



## 特集：三重県における野鳥の会の歩み

くなりました。さて、任意団体から財団法人の支部となったしばらくの過渡期において会の運営と企画を担当していただいた橋本祐子会員（現在休養中）は若い活力を発揮され、新風を吹き込まれました。お陰で各ブロック単位の活動が自由にかつ円滑になるよう努力されたのは印象深く、頭が下がりました。それが基盤となって中部ブロック大会（2003年）を当番支部として北勢地方で、第12回野鳥密猟問題シンポジウム（2004年）を主に南勢地方の会員有志の方々に成功させていただき、全国の野鳥に係わる人達からその活躍振りのお褒めをいただいたことはつい最近のことでした。しかし、良いことばかりではありませんでした。谷本勢津雄保護部長が2004年に突然他界されたことは支部として痛恨の痛手でした。彼は1978年頃から発生した数多くの鳥類調査に加わり、さらに様々な開発から鳥類の生息地を保護するよう世間に訴えられてきました。彼は三重野鳥の会設立の翌年に松

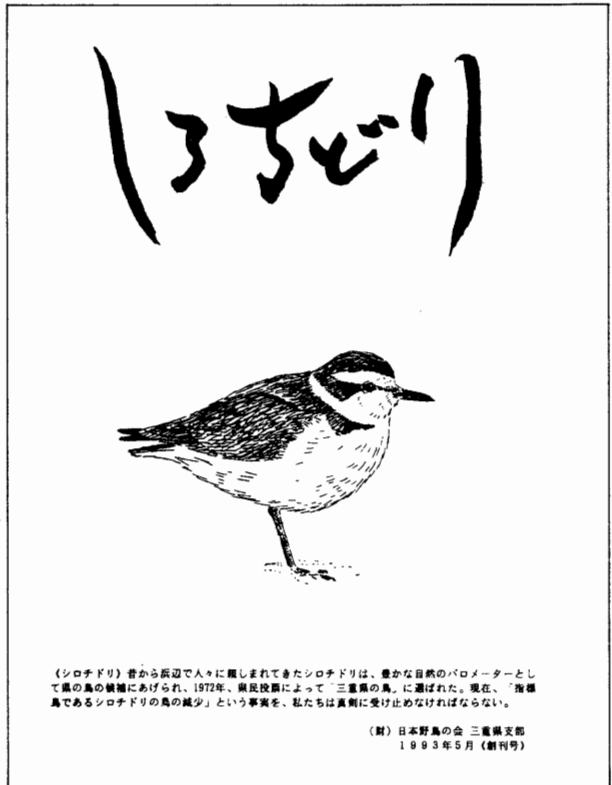
阪港へバードウォッチングに行ったとき偶然に出会ってからの人でした。「今まで猟銃で鳥打ちをしていたが思うところがあって銃を捨て、鳥の写真撮影と調査で保全することの大切さを他の人達に知ってもらうように努めたいから入会します。」と言われ、入会されました。それ以来彼は大いに活躍され、支部としてはなくてはならない人でした。ここに謹んでご冥福をお祈りし彼の野鳥への思いを目標に自然と人との共生について真剣に活動して行きたいと思っています。

このような一貫した普及活動の一つとして私は今年度から研修会を開いています。その中で「鳥とはどんな動物」なのかみなさまと一緒に考えて行きたいと思っています。来年からはさらに「環境と鳥」について考えてみたいと思っています。基礎的なことから話し合い、楽しく気楽になんでも話し合える研修にしたいものです。

### しろちどり創刊号について

#### 編集部

しろちどり創刊号は1993年5月に発行されています。現在でも使われている濱田 稔氏による題字はその時からのものです。表紙には『昔から浜辺で人々に親しまれてきたシロチドリは、豊かな自然のバロメーターとして県の鳥の候補にあげられ、1972年、県民投票によって「三重県の鳥」に選ばれた。現在、「指標鳥であるシロチドリの減少」という事実を、私たちは真剣に受け止めなければならない。』と木村京子氏によって記されています。1ページ以降、杉浦支部長の挨拶文と故橋本太郎顧問の文があります。また探鳥会記録、野鳥情報などがあり、おおよその体裁は今と変わりありません。故谷本勢津雄氏の大台ヶ原和佐又山の野鳥についての文、吉居瑞穂氏のサシバの春の渡りの調査結果が載せられています。研究部からシロチドリとコアジサシの繁殖情報を集めるよう、呼びかけがあり、その頃からシロチドリが三重県支部にとって重要な鳥であることがわかります。



しろちどり創刊号の表紙



### 「しろちどり」50号記念座談会

はじめに

「しろちどり」50号を記念して会の中心になって活躍しておられる支部長、副支部長、事務局長に集まっていただき、「しろちどり」編集長も加わり、座談会を開きました。司会は元「しろちどり」編集長の小坂里香さんをお願いしました。なお、座談会の一部は紙面の都合上削除させていただき、また発言の一部は意味の変わらない範囲で、読者にわかりやすいよう語句を変えさせていただきました。(編集部)

出席者：杉浦支部長、高橋副支部長、  
市川副支部長、西村事務局長、  
平井「しろちどり」編集長  
司会：小坂 元「しろちどり」編集長

(司会) 司会の小坂です。今日は、ざっくばらんな座談会でいろいろな思いをお話いただきたいと思います。杉浦支部長から、「「しろちどり」の発刊50号を祝して」の文を頂きましたのでそれを踏まえてお話しを進めたいと思います。三重野鳥の会時代の思い出、今後の支部活動のあり方の2点について進めて行きたいと思います。

#### 三重野鳥の会発足

初めに三重野鳥の会を立ち上げた当時のお話をお聞かせいただきたいと思います。

(杉浦) 樋口行男氏が山下善平(昆虫学)氏から三重野鳥の会をたちあげて欲しいといわれ、又倉田 篤さんが紀伊長島で遭難され、それがきっかけでしっかりしたものを作っておかなければということで樋口行男氏を中心に立ち上げました。設立時のメンバーは樋口行男氏の友人が多いのです。私にもお誘いがかかりました。

(司会) 市川さんも当時のメンバーのお一人ですがご自分から参加されたのですか？

(市川) 私が鳥に興味を持ち始めたのは中学校の物理クラブで鳥に興味を持ったのがきっかけです。三重野鳥の会に入ったのは樋口さんからの働きがあったからです。発足の前の年に鈴鹿の教育委員会の主催で椿神社あたりで探鳥会が

あった、その時の講師が樋口さんでこの時、初めて樋口さんにお目にかかりました。この時に、これから鳥のすきな人が集まって会を立ち上げるのでその時は一緒にやりましょうとの誘いを受けたのです。これが私が野鳥の会に入ったきっかけです。

(杉浦) 倉田さんの教え子が樋口さんなのです。倉田さんが持ってみえた紀伊長島や、三重県内の膨大な資料を、倉田さんが亡くなられたので樋口さんがこれを整理され、三重県博物館の研究資料の報告に出されたり、特別に紀伊長島町から資料を発行してもらったりしました。これがきっかけで樋口さんが世間に知られるようになったのです。

(司会) 三重野鳥の会が発足したのは倉田さんが亡くなられた後のことですか。

(杉浦) そうです。その少し後のことです。

(平井) 倉田さんは沢山のお仕事をやられたようですね。三重県の鳥類のいろんな本を読んだときに、紀伊長島の鳥類とか、鈴鹿山脈の鳥類とかの文献に必ず出てくる、そういう古い時代に大きな仕事をされたというのは我々にとって大きな誇りなんじゃないでしょうか。

(高橋) 倉田さんは当時学校の先生だったのですが、転勤命令が出ますね。それが鳥のいる所、いる所ばかりだったようですね(笑い)出世はぜんぜん考えられない先生でしたね。最初私が樋口さんを知ったのは私が大手の乳業会社に勤めていた頃に、東北から九州まで歩いたのですが、たまたま三重県担当になりましたね。最初の上野城公園探鳥会で樋口さんにお目にかかりました。

#### 会員の活動

(司会) 高橋さんは長野県の御出身ですが、昭和50年頃に三重県に来られ、5年程してから上野城の探鳥会にご出席されたのですね。

(高橋) ええ、そうです。その後は三重大の演習林とか神島での1泊とか、大変楽しい思いをしたことがあります。

(司会) 他に何か印象に残っている出来事は？

(高橋) 神島の時は楽しかったですね。私がいくら飲んでも酔っ払わないもんだから。あいつ



## 特集：三重県における野鳥の会の歩み

にはもう飲ませるななんて（笑い）。

（司会）もったいないから（笑い）。神島はタカの渡りですか？

（高橋）ええ、サンバですね。

（司会）当時は数も多かったですか？

（高橋）多かったです、多かったです。

（司会）その日は特に多かったのですね。

（高橋）ええ、そうですね。低く来ましてね。あの光景は今も忘れられません。

（杉浦）その当時と現在を比べると鳥の数はどの種類もはるかに違いますね。当時の鳥の数が多かったと言う印象はどなたにも残っています。

（司会）そのお話を聞くたびに羨ましいと思いますね。平井さんはいかがですか？

（平井）静岡から転勤でこちらへ来ましてね。僕が参加した最初が、安濃川でコクガンが射殺されたすぐ後の探鳥会で、寒い安濃川で杉浦さんが長々と話をされて、これはひどいところへ入ったものだというのが最初の印象でしたね（笑い）。

（司会）コクガンの事件の後、沢山の人が集まって抗議の探鳥会をされたようですね。

（高橋）射殺されたコクガンは私のところへ来ましてね。レントゲンで撮影したら散弾がしっかり入っていました。それで抗議行動をやりました。その時は沢山の人が集まりました。それ以降、津警察が船でほとんど毎日パトロールをしていました。

（司会）平井さんのカレンダーはいつごろから始めたのですか。

（平井）あれは静岡時代からです。最初はコ

ピーでやっていたのですが。40年位になりますかね。

（司会）安濃ダム探鳥会が今でも盛況なのは、ひとえにあのカレンダーのお陰ではないかと（笑い）。あと何か印象深い事は。

（平井）橋本祐子さんに誘われてやったシロチドリ調査です。巣を見つけるのは難しいと思いましたが、馴れば比較的簡単に見つかるのです。あの当時海岸を歩けば20羽位のヒナは確認できたのですがこの頃は10羽以下なんですね。7、8羽とか。少ない時には2羽位になってしまっ。もう少し保護をちゃんとやりたいと思っているのですが。時間があればもっとやりたいですね。

（司会）西村さんはおしどりバードウォッチャーとしてやってこられましたか。

（西村）神島の探鳥会に参加した時に平井さんがハヤブサのスケッチをされていて。変わった人だなあと（笑い）。でもこんなにユニークな人だとは。

（司会）印象に残っているのは平井さん？

（西村）そう（笑い）。他にも林さんとか。鳥の魅力もあるけど人の魅力もあったりして。未だにズルズルと。鳥というとシロチドリかな。大淀（おいず）の海岸もその当時からみると海岸の様子も変ってきて、自然の海岸が減少してきていることを最近ひしひしと感じています。

### 三重野鳥の会 機関誌

（司会）探鳥の話になると昔は良かった、今は・・・という事で話がだんだん暗くなる方向



祓川河口





へいってしまうので話を変えて、きょうは「しろちどり」の50回記念号の特集座談会ですが、以前の三重野鳥の会時代の機関誌は「あおさぎ」が年1回発行されていて、それを補うために「あおさぎ通信」という軽い読み物があったようですが、発刊の苦労とか印象に残った事があれば教えてください。

(杉浦) 原稿が集まらない。これが一番のネックでした。でも発刊はしなければならぬと言うことで、私が主に書いたりしたのですが、やはりマンネリ化しますので、これではいけないと言うことで、木村京子さんが当時県に勤めて見えていろいろなものを見てみえたので、それを参考にして身近な情報をあげて気楽なものにしようと言うことで発刊したのが「あおさぎ通信」です。「あおさぎ」は出来るだけ自然保護を取り上げようという主旨があったのでどちらかという堅いものになってしまったというのが実情でした。

(司会) 「あおさぎ」は今読んでもアカデミックで個人が調査した報告書が掲載されていたりして、今読ませていただいても勉強になります。「あおさぎ通信」のほうはコミュニケーションの手段で投稿が多く、このようなものが発行できるような力があるといいなと思います。

(杉浦) 「あおさぎ通信」は主として木村京子さんのほうで一生懸命やられたのです。

### 会員の名簿

(司会) 「あおさぎ」の方には会員名簿が記載されていましたね。それで地区内の連絡とかはとりやすかったのかなと思います。支部になってからは名簿なども作られていないので連絡は難しいのではないのでしょうか。

(杉浦) その当時は今のように個人情報はどう言う時代では無かったので会員の方が良心的に名簿を利用してもらっていたので会員の方からぜひ名簿は作って欲しいといわれたので、「あおさぎ」にはいつも載せていました。今では考えられない事です。

(司会) 今はクレームがくるとか、被害があった時に、責任がとれないと言われるのですか。

(杉浦) 最後の号には名簿を載せました。そうでないとどういうメンバーが最後のときにいた

のか、分からなくなるからと思って。現在のメンバーとは大分変っているはずですよ。

### 行政と野鳥の会との関係

(司会) 当時の行政との関係はどうでしょうか？

(杉浦) 三重県との対応が主になりますが、問題が起こって要望を三重県の方へ持ち上げますね。そうすると、県は行政官ですから、法律に基づいてこれは出来るとか、これは出来ないとか言ってくれるのですが、担当が2、3年で替わっちゃうんですよ。だからその間持ちこたえられたらいいというような返事が多くて非常に困ったですね。ですから色々な問題を持ち上げても解決する事は何一つない。押し切られることが多かったですね。今はその点、多少、国や県は変わってきているので、その点は良くなってきたと思いますが、市町村になると未だに変わっていませんね。

(司会) 西村さんは事務局をやっておられますがそのあたりはいかがですか？

(西村) 何かあれば県としても野鳥の会をたよってくるというか、わりと良好な関係です。馴れ合いではなく一定の距離を保った上で信頼されていると感じます。市町村も徐々に変わってきていると思いますよ。

(司会) ちょっと話をすればわかってもらえるようになってきた。

(西村) こちら側の責任も重くなってきていますね。

### 日本野鳥の会支部への変更

(杉浦) 過去に三重野鳥の会を財団にしたらどうかという話が出ましてね。財団にするのに一番困ったのは基本財産が無いと出来ない。それで突き当たってしまったのですよ。表彰されたりしてある程度資金も集まった頃にそれだけの基本財産で財団を作ろうということも考えたのです。で相談したのですが、その時は既に時期がわるくて国全体からの指示で居眠り財団が多くてそれを整理せよとの国の指令があるからそれだけではちょっと無理ですといわれて結局最後まで財団は出来なかった。



## 特集：三重県における野鳥の会の歩み

(司会) ある意味、日本野鳥の会の傘下になったという事で、その問題は解決したということですか。

(杉浦) 支部としては、形なりには力強い会の傘下に入ったということです。

(司会) 行政からはある程度一目置かれるようになった・・・。

(杉浦) そうですね。同じ任意団体でも野鳥の会の傘下にあるんだということで行政の対応は変わってきました。

(司会) 日本野鳥の会の傘下に入ったのが93年3月ですね。それに先立つ92年当時は色々話し合いが持たれたと思いますが、支部になる、ならないという事でいろいろな意見があったと思いますがその事についてはいかがでしたか。

(杉浦) 賛成、反対は半々でした。

(司会) 支部になった方が良いという方はどういう理由からですか。

(杉浦) それはまず会費が上がるわけですね。それが一番ネックだったんです。会費が上がらなければ傘下に入っても良いということになりますよね。支部になった時は確かに会員が減りました。減ったけれど時代の流れでその後入ってくれましたね。今じゃ前の会員よりもはるかに

多いです。

(高橋) 僕は反対した方ですよ。それはこんなに雰囲気の良い会ですね。このままでいいじゃないかと言った記憶がありますね。

(司会) 支部になったあとのメリットはどうでしょうか。

(杉浦) メリットは全国的な交流が出来るような雰囲気が出来てきたから良いと思ってますよ。もう一ついいのはね、その当時特定の人が独断と偏見でやっていたのが無くなって、若い人達がどんどんいろんな事をして下さるようになった。これは会として一番大きなメリットだと思います。これからもそうあって欲しいと思いますけれど、社会が多様化すればするほど、又事前保護という言葉が独り歩きでなく住民の間にしみこんでいけばいく程、今の会になって本当によかったと思っています。

### 支部の最近の活動の問題点

(司会) 支部になって十年たつわけですが最近の支部の活動状況をご覧になってどういう感想をお持ちでしょうか。

(杉浦) 今言ったとおりです。私は和気あいあいと楽しい三重県支部を自慢しています。もう一つは会員として最近入られる方はシニアの方が多いですね。もっと若い人も入って欲しいですね。その辺が残念だなあと思うのですがやむをえないでしょう。シニアの方にも趣味だけをする人と自然に対して何かしなければならぬという人の大きく分けて2つあるんですね。で、趣味の方というのは現役の時、本当に平穩無事で来られた方だと思うんですよ。私なんか鳥をやっていて一番鳥に助けられたと思うんですよ。大きな壁に突き当たった時でも、鳥をやっていたお陰でくじけることも無く辛抱して今も鳥を見ていられるという事に一番大きなメリットだったなあとと思っています。私、最近高齢者の自動車講習をやったんです。そしたら、テストの時に言われたのが、動体視力が年齢のわりにいいじゃないですか(笑い)。耳もいいって言われましたよ。ただ最後に年齢が年齢ですからハンドルは持たない方が良いでしょうよといわれました(笑い)。



ミサゴ



(司会) もう一方の自然に対して問題意識を持っているシニアの方のほうはいかがですか。

(杉浦) それはねえ。発掘すればどんどん出てくるのではないのでしょうか。年よりはいっこくですがこれだと思ったときはそれに突き進まれる可能性は充分ありますからねえ。

(平井) 野鳥の会の平均年齢があがっていて、危機感を持っているんですが一方でカメラで野鳥を追っかける若い人達と一緒にやればいいと思っているのですが。野鳥の会でやっている探鳥会で、ただ見て楽しむというのにはやはり限界があるのではないかと思っています。カメラのような魅力的な媒体を活用することをもっと考えてみていいんじゃないかという気がします。

(司会) 今、お話しを伺ったのですが、インターネットを始めとして色々な情報化が進んでいまして鳥の見方についても多様化しています。そういう中で必ずしも探鳥会で教えてもらって鳥の見方を覚えるという必要が無くなってきているのですね。カメラの話もありましたが野鳥の会の存在意義が薄れてきている、必要が無いのではないかという極論も出ています。その中で会のメリットとか有意義についてどのように思われますか。

(杉浦) それぞれの個人の考え方でね。私には判断できかねるのですが。探鳥会に出てくる人に一言お願いしたいのは、あー鳥を見た見たというだけでなく、自然の食物連鎖を始めとした生態系のサイクルですね。そういうものを念頭において、色々見てもらおうと、非常に面白くて奥の方へ足を突っ込んで行くんじゃないかという気がしてるんですよ。そういう見方を出来るだけわかりやすい方向で今年から始めた研修の課題になっています。広い視野で鳥を見て欲しいということをお願いしたいですね。

(司会) 鳥を見ているだけでは損をしているような気がする・・・。

(杉浦) 一つね。若い人が入っているのはね。遊びの心がかなり入っているんですね。そういう事があるから惹きつけられているんじゃないかという気がします。それをどうしたらいいかというのが会としての大きな課題かもしれませ

ん。

(市川) それから若い人については誰かがやろうと言うと集まってきてそれが面白くなってきて楽しくやろうと。「かめっぷり」(三重大学の学生が中心となり、ウミガメの調査を行っているグループ=編集部)なんかそうですね。

(司会) そういう色々な楽しみがある中でどうして野鳥の会でなければならないのかという事です。野鳥の会にどうして入らなきゃいけないの、入ってどうなるのという質問に対して私達はどういう答えを与えられるのでしょうか。

(市川) ひとつは人のつながりという事がありますね。また最初は何も分からないので人に教えてもらう。それである程度自分で分かるようになったら一人で行くというケースがあるのでは。

(司会) それらのどれを選ぶかでしょね。人とのつながり、知識を得るという事もインターネットで得られるわけですね。それなのにどうして野鳥の会なのか、野鳥の会の存在意義はあるのかという事をこれから考えていかなきゃいけない。

(西村) 会の目的に 環境を守る という考え方を広めるために活動をしていくという考え方を皆さんに持っていただければありがたい。なかなかそこまで持っていけないので、四苦八苦しているのですけれど。

(平井) 僕はそんなに大げさに考えることではなく鳥を見て楽しむのが一番の目的で、一応自然保護団体にはなっていますけど。本部の活動をみてもそんなに保護に特化して一生懸命やっている訳ではないですね。大きな柱になってはいますけど。そういう楽しみをもっともっと若い人に楽しんでもらいたいのですけれども。系統的に学んでいくのは人に教えてもらうしかないし、どういうところにはどんな鳥がいるというようなことは誰かについて現場で学ぶしかないんじゃないかと思います。しかしかんせん我々と、例えば大学生とか20から30代の若い人たちの間には今、接点が全く無いんです。どこかで一つ接点を作った方がいいのではと思います。



## 特集：三重県における野鳥の会の歩み

今後の支部の活動にむけて

(司会) 色々と問題が浮き彫りにきたと思いますがこれからどのような活動を広げていったらよいのでしょうか。

(司会) 会としてはどのような活動をしていけば良いと思われませんか。

(西村) そこをこちらがききたいんです。(笑い)、アンケートなどもとってみようと考えています。

(司会) 例えば探鳥会のリーダーの資質を生かした活動もあると思います。高橋さんは地元で公民館活動などで探鳥会をなさっていますが。

(高橋) 感動をあたえる事、遊び心が無くちゃいかんという事ですね。一番感動して見ていただいたというのはヤマセミとか、ミソサザイの巣立ちです。目の前で巣立ちしますんでね。皆さんが動かないんですよ。皆さんが求めているのは鳥の名前が解ればいい。それと、同年代の友達を作りたいというのが目的のようです。感動と遊び心がマッチしたものが良いのではないのでしょうか。例えばムクドリが集団で水浴びしますね。ヤマガラが貯食をする行動など、時期によっていろいろありますね。リーダーが、そういうものを探してみていただくのがいいのではないのでしょうか。今、公民館活動で一番人気のあるのが、男の料理と探鳥会なんですよ。人が減らないですよ。

(司会) 鳥を見ていると高橋先生の弟子ですという方にお会いするんで、野鳥の会に入っている方いらっしゃいますかとお聞きすると、いいえとおっしゃるんです。ちゃんとお勧めしてください。(笑い)

(市川) いま新しいレッドデータブックで野鳥の会三重県支部をまとめていますけど、資料が少ないのもう少し細かく三重県内の調査をしていきたいと思っています。会としてもやって欲しいと思っています。

(司会) 課題としては調査できる人材が育っていないという事が、一番の問題なんじゃないかと思うんですが……。

(杉浦) それは一番の悩み事です。昔からそうなんですよ。今後は楽しみながらそういう事こともやっていただいて少なくともデータだけは

とれる人たちがどんどん増えて欲しいというのが私の希望なんですよ。それには感動を与えられるようなやり方をする事が、私達に課せられた課題なのかなという気がします。

(司会) 野鳥の魅力も多くの人に……。

(杉浦) ええそうです。野鳥を通じて自然の魅力ですね。

(司会) これからも勉強の機会をどんどん支部として増やしていく……。

(杉浦) そうですね。ところが研修会をやってもましてもね。比較的参加していただける人が少ないんですよ。残念ながら。

(司会) 先ほども言いましたけれど会の運営をしている人が変らない、新しい人に育ってもらわないと。

(杉浦) 毎年、毎年同じ人が研修会をやっていると、またあれがやっているのかということで終わっちゃうから。いい代わりの人があればどんどんやっていただきたい。

(高橋) それでも若い人は野鳥の会の会員である事にプライドを持っています。結婚の際にね、若い男性なんかも理解ありますね。野鳥の会の会員か！なんてね。またこれが入試の良い評価になるなんてね。(笑い)

(司会) ISOみたいですね。(笑い) 入っている事に誇りが持てる会になるようにこれからも努力していかなければいけないと思います。

(司会) 何かイベントがあると勢いがかかりますね。万博もそうですが……。

そういう意味で去年の密対連(全国野鳥密猟対策連絡会=編集部)のシンポジウムがいいきっかけになったのかもしれませんが。(2005年三重県で開催された=編集部)

(杉浦) だからやっぱりイベントなんかも必要なんですね。

(司会) それではこの辺で時間も参りましたので、「しろちどり」50号記念の座談会を終わりたいと思います、また次回、60号にむけてもう一度生まれ変わって再生を図って行きたいと思います。今日は本当に有難うございました。

# ふあるこおばちゃんの 今日も鳥日和

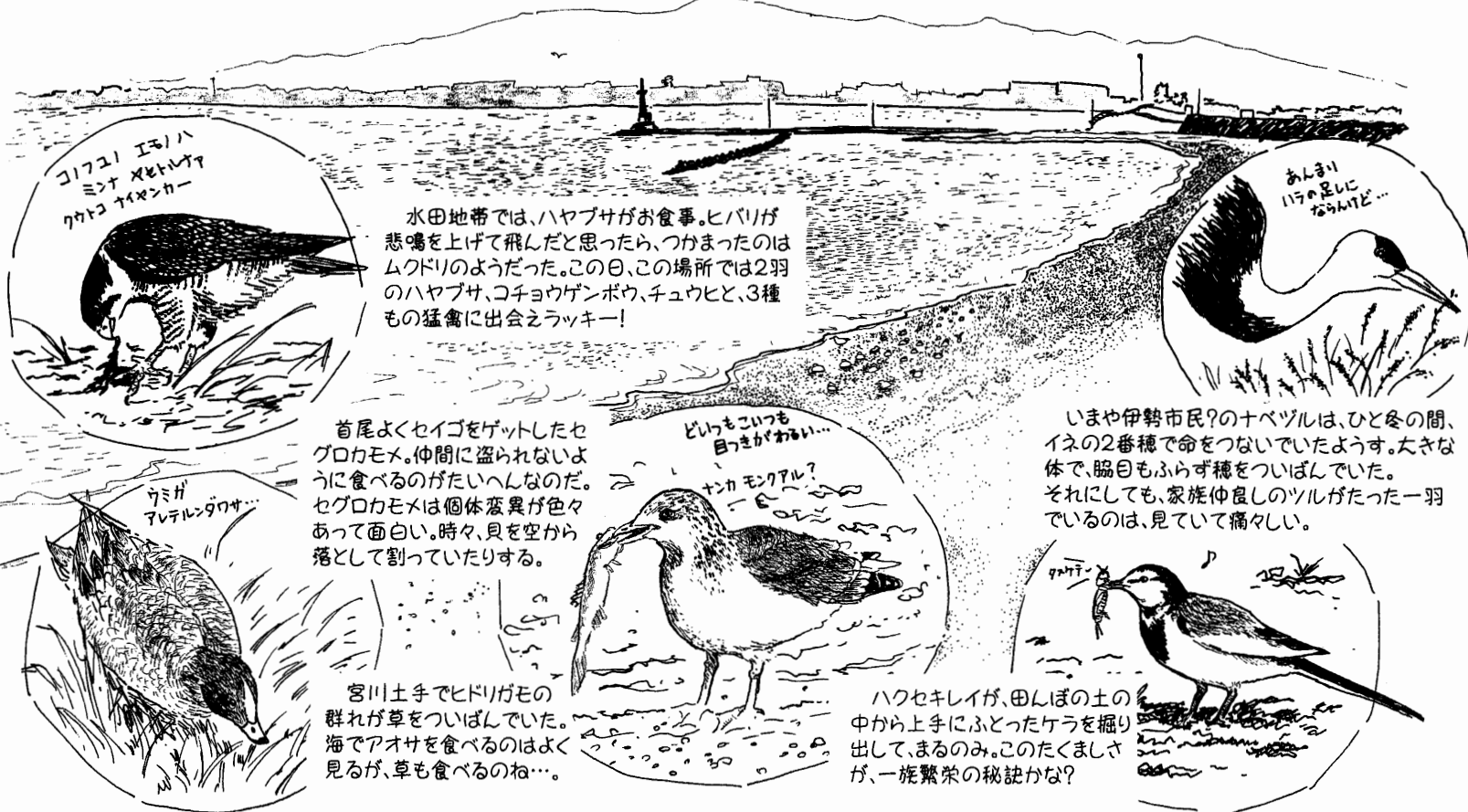
その9



例年になく厳しい寒さが続くこの冬。北西の風吹き付ける海辺では、カモメの姿が目につきます。明和町の海岸はカモメ観察の好ポイント。師走の忙しさをぬって、鳥たちを慰問してみました。(実は単なる覗き見です。)

ところで、これを描いている2月現在になっても、ツグミ、アオジなど、ごく普通種のはずの冬鳥たちがなかなか見られません。山の果実が豊作で平地に降りてこない、という説もあれば、渡り時の寒波で落鳥したという説も…。

厳しい冬、懸命に食べ物を探す野鳥たちが無事に越冬し繁殖期を迎えてくれることを、願ってやみません。



今日も鳥日和



小坂里香 (度会郡度会町)



しろちどり50号記念アートギャラリー



セグロカモメ (左)  
とワシカモメ (右)  
大紀町  
嶋田春幸  
(南伊勢町)

ウズラシギ  
津市内  
小坂里香 (度会町)



セイタカシギ  
津市内  
橋本富三 (津市)



ヒクイナ  
津市内  
安藤宣朗（四日市市）

ハヤブサ  
津市内  
石原 宏（津市）



エナガ  
津市内  
谷 貢（津市）

いずれも種名  
撮影場所、撮影者  
（住所の順）です



### 三重県上野盆地における溜め池の 魚類相

岐阜経済大学・生物科学 森 誠一

#### 上野盆地の水系

三重県上野盆地の水系は、ほぼ南から北に流れる木津川と東側から合流する支流（柘植川、服部川、矢谷川、比自岐川）と西から合流する岩根川などからなる。木津川水系は琵琶湖・淀川水系に属する。ちなみに、三重県の淡水魚類相は、木曾3川水系を含む東海・伊勢湾流入河川水域、熊野灘への流入河川水域、伊賀上野地域の琵琶湖・淀川水系に属する近畿中央水域という淡水域に基づいて3区分される（名越、1978、1986）。これらのことは、三重県には、わが国有数の豊富な淡水魚類相をもつことを示している（清水・森、1985；森、1995；多度町史編纂委員会、1997）。

この上野盆地は標高数百mの山や丘陵地帯に囲まれ、谷間から平地になる斜面に800を超える溜め池がある。同地域は、周辺丘陵地に溜め池が多いことも大きな特徴である。いわゆる一方を堤体で堰き止めた谷池がほとんどで、水深は奥ほど浅く、堤体に近いほど深い。形状はおおむね細長楕円である。すべての溜め池に識別番号を付けたが、同時に池の名称についても調べた。地図上に名前が公的になくても、周辺域でのみ使用されている通称が多く、池にあった。

そのうちの溜め池は、現在においても、水田を中心とした利水や治水としての機能を持ち、また防災機能を中心に管理されているものもあった。溜め池によっては毎年のように水抜きをしたり、数十年もそのままの状態である溜め池もあり、管理は池ごとに大きく異なっていた（図1）。現在ではその管理体制や堰改修の新旧などによって、いくつかに類型化できる特徴もっていた。また、漏水や土砂掘削のため改修工事が、あるいは水辺環境整備の中で土木事業が実施されていた。溜め池の管理状況を把握するために管理者に往復葉書で、各池の水抜き状況や計画などを聞き取りした。管理にはおもに、放水・水抜き、堤体改修、草刈りなどがある。ちなみに、管理者ごとに管理する池の数は多様であり、1個から10個以上を管理対象としていた。

本稿では、これらの溜め池に調査地点を設け、溜め池ごとの利用状況に応じて実施した魚類相

の結果を紹介しよう。

#### 調査方法

魚類の捕獲調査は1997～1999年を中心に、木津川流域の上野盆地に散在する、上野城の堀池を含む約100個の溜め池において実施した。特に、32個の溜め池においては、オオクチバスとブルーギルの外来魚と在来魚の個体数関係を検討した。外来魚と在来魚の両グループの捕獲による個体数の比較と溜め池管理の実態を調べ、在来種に対する外来魚や溜め池管理などの影響の程度を把握した。

魚類の調査方法は投網、手網、モンドリによって行った。外来魚と在来魚の関係を検討するための調査は、池ごとに網モンドリを1～2時間、2～3人で手網20分、投網5～10回、目視計数（オオクチバスとブルーギル）によって捕獲把握した個体数をもって行った。なお、魚種の確認は原則として現地で行うが、現地で同定が困難なものについては5%ホルマリン液で固定し、持ち帰って詳細を検討した。また、現地調査時に調査地点及び周辺の状況、調査状況、捕獲された魚種の概要を記録し、写真の撮影を合わせて行った。

#### 溜め池の魚類相

小水路を含む池沼で、16種の淡水魚が捕獲確認された。コイ科魚類が半数以上の10種で、残りのうち2種がオオクチバスとブルーギルであった。ここではオイカワ、カワムツ、モツゴ、カワバタモロコ、タモロコ、ヒガイ、バラタナゴの7種を総称して小型コイ科魚類とする。本調査水域は内陸部にあるため、汽水魚や回遊魚は分布していない特徴がある。

溜め池の魚類相は水干しや改修工事などの池管理の状況によって、大きく影響を受けるようであった（図2）。コイやフナの放流が随時実施され、また、それに混入してくる魚類などによっても池の魚類相は変化するものと思われる。水の入替えがあまり行われておらず、水草類が繁茂している溜め池には、モツゴが多く生息していた。希少魚であるカワバタモロコが、友生と市部地区などの溜め池で確認された。本種の生息は安定した水位と水草がよく生育し、オオクチバスやブルーギルなどが認められない溜め池に限られていた。

一方、水管理や改修がされていなくても、外来種が多く確認された溜め池には、在来魚種が





とても少なかった。上野盆地のメダカは、溜め池や水路では散在的に生息していたが、農業形態の変化による水環境の変化に加えて、魚食性の外来魚の増加とともに、その生息域が減少しているといえる(片野・森、2005)。このことは、生息地としての溜め池の存在意義が大きいことを示すかもしれない。

カワバタモロコはこれまでの報告書ではなかった(近畿地方建設局木津川上流工事事務所、1975、1990；(仮称)諏訪カントリークラブ造成計画に係る環境影響評価準備書、1990)が、すでに生息情報の知見があった。本種は特に、減少傾向にある希少小型コイ科魚類であり、溜め池のような止水域環境に適した生活史をもっている(森、1995)。

いくつかの溜め池では、オオクチバスとブルーギルが顕著に捕獲現認された。向芝の溜め

池の一つでは、ブルーギルとアメリカザリガニしか捕獲されなかった。オオクチバスとブルーギルが急速に分布域を広げている。1990年当時、聞き取りでオオクチバスが上げられているが、捕獲されるほどではなかった。今回、ブルーギルは上野盆地での初めての記録となる。この2種の分布域の広さはオオクチバスの方が大きかったが、ブルーギルが生息している場合、溜め池の生物量の大半を占めるのではないかと、思われるほどかなり多く認められる池沼があった。こうした魚食性が強い外来魚の放流は禁止する必要があり、教育・啓発や池管理などにも系統立った工夫が必要となろう(森編、1998、1999、2000)。

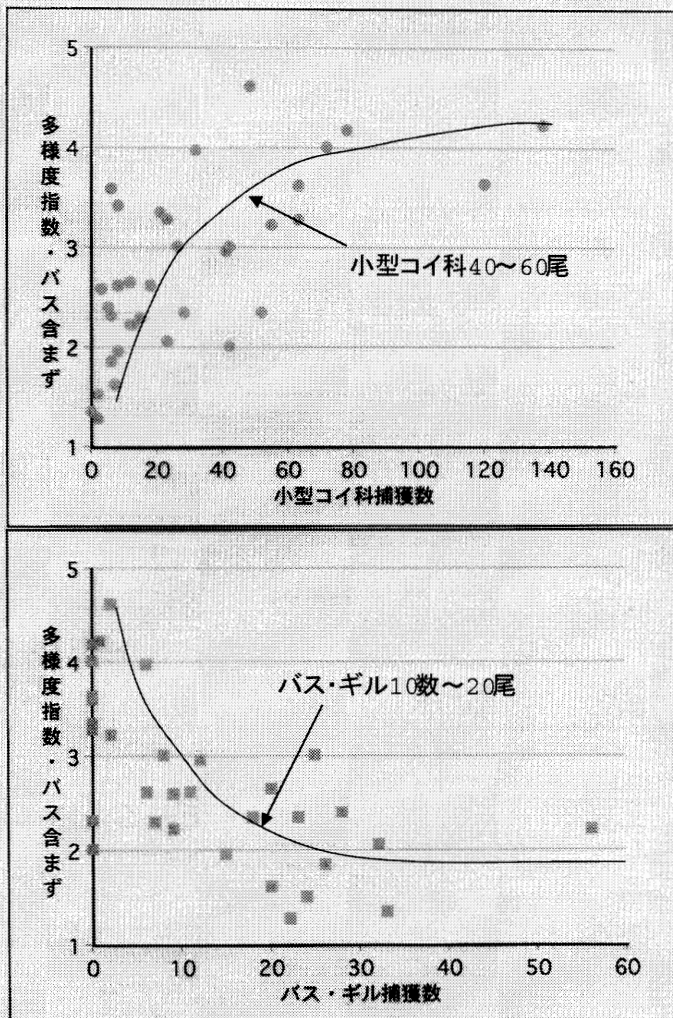
溜め池における外来魚と在来魚

上野市中央東部の友生、市部、沖や北部の高倉、野間にある32個の溜め池において、外来魚(オオクチバスとブルーギル)と在来魚の関係を、その単位時間当たりの捕獲数から検討した。両グループの捕獲による個体数の比較と溜め池管理の実態を調べ、在来種に対する外来魚や溜め池管理などの影響の程度を把握した(図2)。

オオクチバスとブルーギルが多い溜め池には、小型コイ科魚類(カワバタモロコ、タモロコ、メダカなど)が少ない傾向が明らかに認められた。このことは、魚食性外来魚に小型コイ科魚類が食害を被り、減少していることを意味していると考えられる。もちろん、この減少傾向は、水管理、改修工事、水質汚染など他の要因によっても説明できようが、外来魚の影響は大きな一つの要因となっていると思われる(森編、2001)。

バス・ギルが単位時間当りに30尾採集されると、他種の小型コイ科魚類が急に少なくなり、逆に小型コイ科魚類が60尾採集されると、バス・ギルが採集

三重県上野市・溜め池における多様度指数(SID)と魚類捕獲数





## 特別寄稿

されないという傾向が認められた(図3)。また、バス・ギルが少なくても、同様にコイ科が少ない溜め池もあった。これは、コイ科魚類の生息に与える影響要因としてバス・ギルの存在があるのではなくて、おそらく水管理(水抜き)や改修工事などがあり、溜め池に物理的な影響を与えた結果と推定される。そうした溜め池は魚種数や個体数がそもそも少なく、水を張った後に放流することが実施されていた。これらは今後、ギル・バスを駆除するにしても、在来魚種を保全するにしても、溜め池の管理において効果的な方法を、管理者や行政、研究者らと協議し合意を得ていく必要があることを意味するものといえよう(森, 1988; 森, 1998; 森編, 2003)。

### 参考文献

片野修・森誠一編集(2005) 希少淡水魚の現在と未来: 積極的保全のシナリオ. 信山社

近畿地方建設局木津川上流工事事務所(1975) 木津川上流ダム環境調査報告書

近畿地方建設局木津川上流工事事務所(1990) 木津川上流域魚貝類調査業務報告書

(仮称) 諏訪カントリークラブ造成計画に係る環境影響評価準備書(1990)

名越誠(1978) 木津川とその周辺溜池の水生昆虫と魚類. 三重県上野市. 三重県自然科学研究会

名越誠(1986) 三重県その自然と動物. 魚類(淡水産). 三重県その自然と動物編集委員会.

三重県土木部(1982) 比奈知ダム建設に係る環境影響評価書.

森誠一(1988) 淡水魚の保護—いくつかの現状把握といくつかの提起. 関西自然保護機構会報. 16: 47-50.

森誠一(1994) 河川形態—名張・滝川を例にして. 三重自然誌. 1: 19-26.

森誠一(1995) 津市南部丘陵地におけるカワバタモロコ. 三重自然誌. 2: 12-18

森誠一(1998) 復元生態学と自然の配慮. 応用生態工学

森誠一編集(1998) 魚から見た水環境: 復元生態学に向けて. 信山社サイテック

森誠一編集(1999) 淡水生物の保全生態学. 信山社サイテック

森誠一編集(2000) 環境保全学の理論と実践 I.

### 魚類相(池沼)

オオクチバス

ブルーギル

コイ

コイ科

フナ

ゲンゴロウフナ

オイカワ

カワムツ

モツゴ

カワバタモロコ

タモロコ

ヒガイ

バラタナゴ

ドジョウ

タウナギ

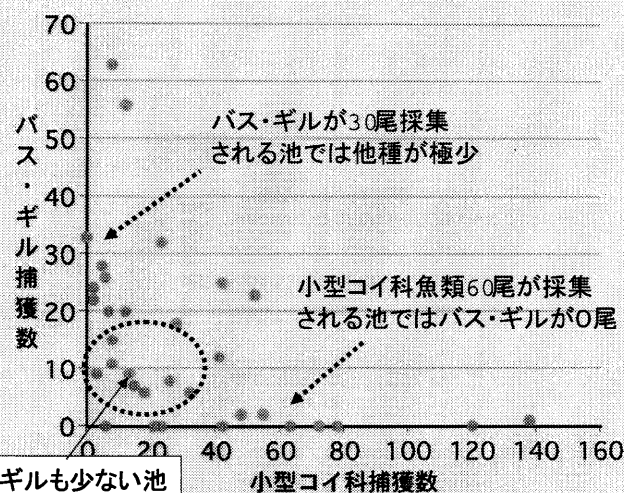
メダカ

トウヨシノボリ

16種

### 三重県上野市における溜め池の魚類相調査

#### 小型コイ科魚類と外来魚食性魚類の捕獲数の関係



・調査期間: 5月~11月

・捕獲方法:

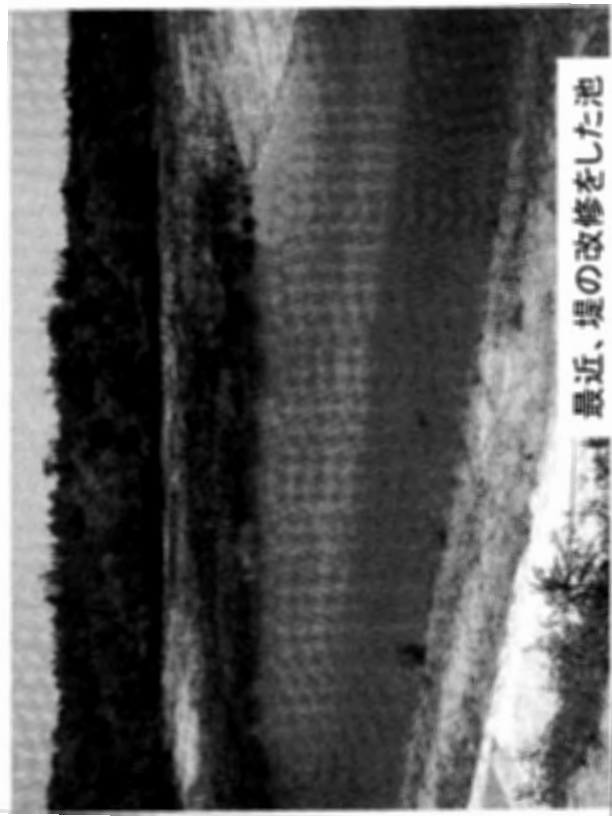
網モンドリ1~2時間、手網2~3人20分、投網5~10回、  
目視計数(バス・ギル) 2つのグループ間の生物量の比較も



玉地区

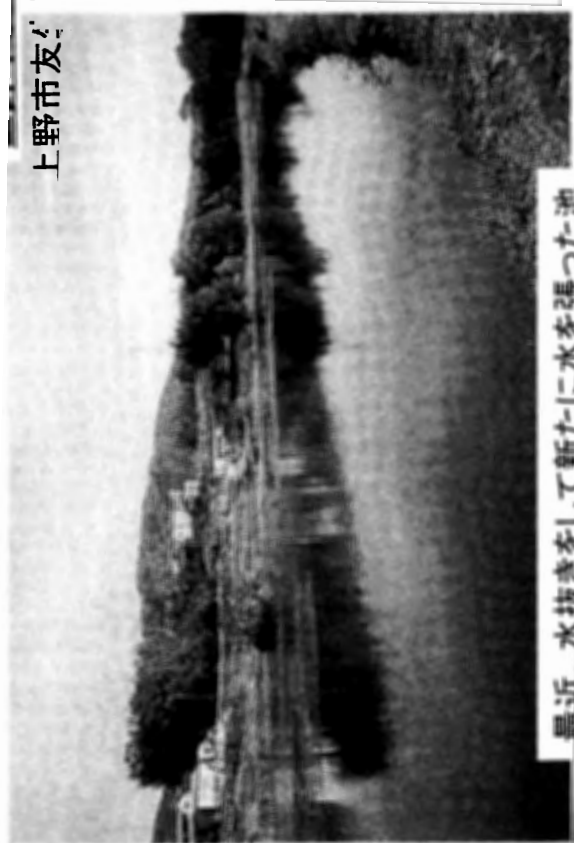


近年、水抜きをしていない池



最近、堤の改修をした池

上野市友



最近、水抜きをして新たに水を張った池



水抜きをした池



## 特別寄稿/野鳥記録

信山社サイテック

森誠一編集 (2001) 環境保全学の理論と実践Ⅱ、  
信山社サイテック

森誠一編集 (2003) 環境保全学の理論と実践Ⅲ、  
信山社サイテック

森誠一・清水義孝 (1986) 三重県宇賀瀬のモロコ  
について、淡水魚、12: 71-73. 淡水魚保護協会

森誠一・渡辺勝敏 (1990) 淡水魚の保護—ハリコ  
とネコギギの場合から、淡水魚保護、3:  
100-109. 淡水魚保護協会

清水義孝・森誠一 (1985) 員弁川の魚類相と分布

、淡水魚、11: 135-142. 淡水魚保護協会、  
多度町史編集委員会 (1997) 多度町史・自然編、三  
重県多度町教育委員会

お詫び：森先生のお原稿については49号「特集：  
三重県のため池とカモ」に掲載する予定で投稿  
を依頼したのですが、編集の都合で49号に掲載  
することができなかつたものです。おわびし  
て50号に掲載いたします。(編集部)

### 野鳥記録サルハマシギの報告について

(保護部)

前回49号の野鳥情報でのサルハマシギの報告に  
ついてShorebirds, P.Hayman, J. Marchant and  
T. Prater Christopher Helm & A & C Black,  
London 1986等を参考に考察した。

前回の報告には2枚の写真があり、詳細に検討  
した。この鳥はサブターミナルバンドが判然と  
せず、日本でよく撮影されるサルハマシギ幼鳥  
ではない。成鳥冬羽の可能性が考えられる。嘴  
の基部の厚さ、嘴の長さと同長については兩種  
で異なるが、写真からは明確な判断ができない。  
肩斑はサルハマシギは長く、眼の後ろまで明瞭  
であるが、写真の鳥はハマシギ的である。また  
肩斑の上にサルハマシギではわずかに白い筋が  
(キリアイのように) あられるが、この個体は

ハマシギ的である。もともとこの白筋のないサ  
ルハマシギもあるようである。頸、脚の長さに  
ついては兩種で違いがあるが、今回の写真から  
は不明である。

以上の考察から2枚の写真ではこの鳥がサルハ  
マシギであるとの明確な根拠は得られていない。  
またハマシギであるとの確証も得られない。報  
告者もこれ以上の写真や観察記録など(飛翔時  
の腰の白斑の有無など)を持ち合わせていない  
ようであり、サルハマシギの記録は削除するこ  
とが適当であろう。

写真を添付して報告されたにもかかわらず、  
保護部内で十分検討せず、掲載してしまったこ  
とは問題であり、今後このようなことの無いよ  
うに、紛らわしい種についての記録には注意し  
たい。(文責：平井)

### 野鳥記録担当の交代

今回は、届けられた記録のなかからの「抜粋」  
とさせて頂きました。

私が保護部で「野鳥記録受付窓口」をお引き  
受けしてから1年が経過します。

当初は、PR不足のためか記録がなかなか集ま  
らず「拍子抜け」したのを思い出しながら、最  
近寄せられる沢山の記録報告を大変嬉しく思い、  
感謝いたします。有難うございました。

今後は、私の大好きな山歩きで「道すがらこ  
んな鳥に出会った」などの記録を、報告する側  
から関わっていきたくて考えています。そして、  
「野鳥記録報告」が会員に習慣として定着化し、

将来そのデータベースが「野鳥の会三重県支部」  
のかけがえの無い財産となることを希望してや  
みません。(保護部 川口久美)

なお、今後の野鳥記録は保護部 近藤義孝  
までお送りください。



これまでどおり、電話での情報は記録が不確か  
になるため、受け付けません。郵送、あるいは  
Eメールでお願いします。画像があれば添付し  
てください。識別に用い、場合によっては支部  
報に掲載します。

## 野鳥記録



## 野鳥記録(抜粋)

(受付順&gt;記録順)

種名	個体数	観察日	場所(通称)		備考・メモ	報告者
コクガン	4	(05年)11月8日	三雲町	雲出川河口	中州又は干潟にいるのを確認	安藤 宣朗 大塚之稔(密対連)
	7	12月14日				
	6	12月31日				
ミヤコドリ	26	11月8日	三雲町	五主海岸	中州又は干潟にいるのを確認	安藤 宣朗 大塚之稔(密対連)
	31	12月14日	津市	志登茂川河口		
	35	12月31日				
ヘラサギ	1	11月7日	津市河芸町	中の川河口	11/8岡八智子氏追認	谷 貢
	1	11月22日			安藤 宣朗	
ミンサザイ	2	11月30日	菟野町	溪流沿い登山道	「チャ…」と警戒鳴き	川口久美
シロガモ	1	12月11日	御浜町市木	海上	1/9日2羽、15日3羽	中井 節二
ミミカイツブリ	1	12月11日	御浜町市木	海上		中井 節二
トモエガモ	15	12月16日	御浜町市木	海上		中井 節二
	10	12月17日	御浜町三軒屋	壺の池		
	7	(06年)1月2日	津市安濃町	安濃ダム	♂:3、♀:4	平井 正志
ツクシガモ	7	(05年)12月17日	御浜町市木	海上		中井 節二
	4	12月29日	松阪市	雲出川河口		安藤 宣朗
	6	12月31日			大塚之稔(密対連)	
ハイロヒアシギ	1	12月24日	津市	町屋海岸	岡八智子氏追認	田中洋子
	1	12月31日	松阪市	雲出川河口		大塚之稔(密対連)
ズグロカモメ	3	12月31日	松阪市	雲出川河口		大塚之稔(密対連)
ヘラシギ	1	10月6日	津市	雲出川河口	幼鳥と判断	今井 光昌
コハクチョウ	2	12月21日	伊賀市川東	三ツ池		武田 恵世
	73	(06年)1月6日	桑名市多度町			近藤 義孝
	10	1月9日	伊賀市依那古	猪田橋付近		武田 恵世
アメリカヒドリ	1	(05年)12月25日		熊野川	♂	中井 節二
ハイロチュウビ	1	(06年)1月2日	津市安濃町	安濃川右岸水田	♀	平井 正志
ヨシガモ	4	1月7日	津市安濃町	蛇谷池	♂	平井 正志
ミコアイサ	2	1月1日	津市芸芸町	横山池	♀タイプ	平井 正志
	3	1月6日	菟野町	三重用水調整池	♂:2、♀:1	安藤 宣朗
ハマシギ	1,068	(05年)12月31日	津市	町屋浦・白塚海岸	過去最高数を記録	平井 正志
オオコノハズク	1	(06年)1月28日	桑名市多度町	夜間住居に迷込み保護、翌朝放鳥		近藤 義孝
クロガモ	1	(06年)2月12日	松阪市	♂、海岸で潜水探餌中		岡八智子

2月28日現在



### 支部活動の記録

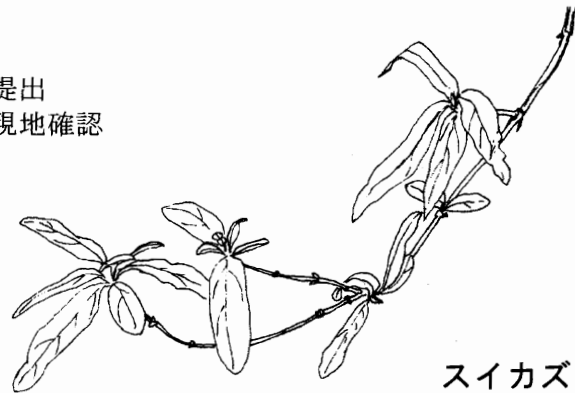
事務局まとめ

#### ● 支部活動の記録 (11月～1月)

- 11/6 2005年度第2回理事会
  - 11/10 会員へアンケート等発送作業 (事務局)
  - 11/21 本会会長が来県されたので挨拶 (支部長)
  - 11/24 木曾岬干拓地整備計画について県と意見交換 (支部長・保護部)
  - 11/30 五主海岸における県の水産資源回復事業について現地説明会
  - 12/1 度会町の自衛隊へリ墜落事故で現地確認
  - 12/5～6 密猟シンポジウム in 茨城へ参加 (事務局長)
  - 12/10 支部報しろちどり第49号発行・発送作業
  - 12/21 「平成17年度県営防ダム事業・環境調査その2委託」入札
  - 12/26 「チュウヒサミット」検討のため本部へ (保護部長)
- 2006年
- 1/15 県委託ガンカモ調査
  - 1/22 保護部会
  - 2/10 鳥羽市風力発電問題で事業者へ意見書提出
  - 2/17 河川整備 (佐奈川) ため国土交通省と現地確認

#### ● これからの予定 (3月～)

- 3/12 2005年度第3回理事会
- 3/26 木曾岬干拓フォーラム sui
- 3 委託事業報告書まとめ作業
- 5/28 2006年度総会
- 6/24～25 チュウヒサミット



スイカズラ

### 密猟パトロール報告

林 淳子

実施日 2005, 8, 17(水) AM 6:00-8:30  
 伊勢警察署生活安全課 3名  
 南勢志摩県民局生活環境森林部 2名  
 鳥獣保護委員 2名  
 日本野鳥の会三重県支部 2名  
 (林 淳子、高木和夫)

午前6時、伊勢庁舎前より出発、鍛冶屋峠、床の峠、剣峠へと向かう。鍛冶屋峠へ入る、密猟者には出会わず。昨年からの支部単独の月例パトロールにより設置されたポスターもそのまま。

次に床の峠に向かう。ここでも密猟者には出会わなかったがポスターの引きはがしが1箇所あり、新しいポスターを貼る。

次に切原より剣峠に向かったがここでも密猟者には出会わず、パトロール終了。結局、今年の合同密猟パトロールは密猟者には出会わずに

パトロールは終わったが昨年よりの支部による毎月の自主パトロールが効を奏したのか、まだはっきりしない。

今年の自主パトロールに於いても密猟者には一度も出会っていないが、ポスターの引きはがしは数箇所あり、又、密猟場の痕跡もあるので楽観はできない。

#### 【事務局からお願い】

野鳥は原則飼養禁止ですが、三重県では一世代につきメジロ、ホオジロのうち1羽の飼養が認められています。しかし、繁殖期の捕獲は許可されていません。県によると現在では非繁殖期であっても許可はないそうです。したがって、野鳥捕獲行為は密猟であり、万が一発見された場合、離れた場所から110か警察(生活安全課)へ通報してください。

危険なので密猟者への「声かけ」はしないでください。



鳥羽市行者山に建設予定の大型風車  
(風力発電) について

保護部

渥美半島から志摩半島にかけては渡り鳥の重要なルートです。このルートにはサシバ、ハチクマ、ハイタカ、ツミなどの猛禽類のみでなく、ツバメ、ヒヨドリ、カケス、メジロ、クロジなど多くの中小の鳥類も渡っています。このルート上の鳥羽市、伊勢志摩スカイラインに隣接する標高309mの行者山(図参照)に鳥羽ウインドファーム株式会社が大型風車3台を建設し、風力発電を計画しています。

もとより、風力発電は排出二酸化炭素を削減する手段の一つであり、我々も歓迎するものですが、国内でもまた海外でも環境、とりわけ野生鳥類への影響が懸念され、建設地は慎重に選ぶべきであるとの意見が大勢を占めています。

今回の建設場所は日本でも有数な渡り鳥のルートであり、当会社の行った2005年秋の猛禽の飛翔調査(10月3日から7日までの5日間)でも、サシバ、ハチクマ、ミサゴ、などが数多くこの地点を通過していることが明らかになり、当該建設予定地は猛禽の秋の重要なルートであることが判明したと考えざるを得ない結果になっています。特に秋の渡りには海を越えた鳥

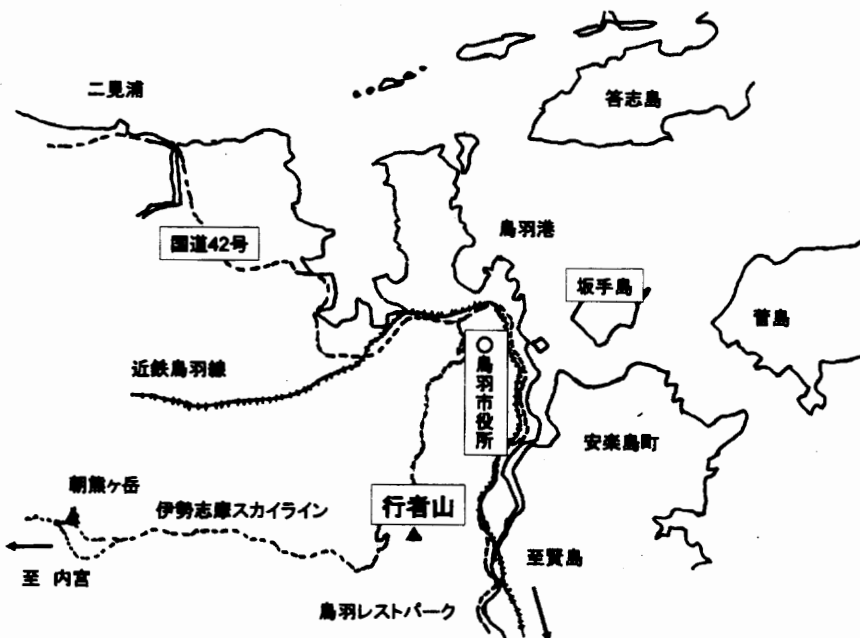
が上陸し、休憩するあるいは山の斜面の上昇気流を利用して高度を稼ぐ重要な地点だと考えられます。

大型風車については①風車への鳥類の衝突による死亡事故、②風車を回避するための飛行ルート、生息地の変更、など問題が指摘されていますが、①死亡事故については、オジロワシなどに死亡例数例が日本でも報告されています(2004年2月5日オジロワシ北海道苫前町、2004年5月5日ミサゴ長崎県五島列島福江島など)。しかし、ほとんどの場合死体は野生動物が持ち去ったり、小型鳥類では発見そのものが困難であり、死亡事故がどの程度起きているかについての統計的なデータはありません。また②飛行ルートの変更については渡りの際のエネルギーの消耗に影響、生息地の分断、変更などの影響があると考えられますが、ただちに個体の喪失として現れないため、調査すらされておらず、「鳥が風車を回避するため影響がない」とする報告書すらある有様です。

今回の調査結果に付け加え、今回は全く調査されていない、①小鳥類の渡りにたいする影響、②秋遅くにわたるツミ、ハイタカ類に対する影響、③春の渡りに対する影響、④繁殖期の鳥類

に対する影響を考えると支部はこの計画に反対せざるをえません。風力発電は渡り鳥の重要なルートや重要な鳥類の棲息地をはずして建設すべきであると考えます。

(文責：平井)





## 探鳥会報告

### 探鳥会報告

2005年11月～2006年1月

#### ● 海蔵川定例探鳥会

2005年11月15日(火) 9:40-12:30

四日市市西坂部町・海蔵川代官橋

尾畑玲子 高 和義 参加者9人(会員8人  
会員外1人)

カイツブリ(2)、カワウ(3)、アオサギ(2)、カルガ  
モ(30)、トビ(2)、バン(4)、イソシギ(1)、キジバ  
ト(2)、カワセミ(2)、キセキレイ(2)、ハクセキレイ  
(8+)、セグロセキレイ(2)、ヒヨドリ(2)、モズ(3)、  
ホオジロ(2)、アオジ(5)、カワラヒワ(1)、スズメ  
(5+)、ムクドリ(2)、ハシボソガラス(3)、ハシブト  
ガラス(1)、ドバト(7)。計22種

新入会員2人がこの会の常連に加わり、賑やか  
になった。下見の時に4回も確認した猛禽類に  
は会えなかったが、野鳥と出会える至福の時を  
参加者全員でもてたのは、ほどほどの人数だっ  
たせいかもしれない。

#### ● 県民の森探鳥会

(共催 三重県民の森)

2005年11月19日(土) 9:30-12:00

三重郡菰野町千種 三重県民の森

矢田栄史 辻 秀之 参加者41人(会員20人  
会員外18人 不明3人)

オオタカ、ノスリ、キジバト、コゲラ、ヒヨドリ、モ  
ズ、ジョウビタキ、ウグイス、メジロ、アオジ、カワ  
ラヒワ、イカル、ハシボソガラス。計13種

沢山の参加者があったが、野鳥は数も種類も少  
ない。探鳥会当日もそうであるが、コゲラ、ア  
カゲラ、カラ類といった種類もほとんど見かけ  
なかった。ここでは珍しく、オオタカが出た。

#### ● 五十鈴公園バードウォッチング

2005年11月26日(日) 9:30-12:00

伊勢市宇治浦田町 五十鈴公園周辺

小坂里香 山田昭子 参加者10人(会員9  
人 会員外1人)

カイツブリ(声1)、コサギ(1)、アオサギ(1)、ミサ  
ゴ(1)、トビ(4)、イソシギ(1)、キジバト(1)、コ  
ゲラ(2)、キセキレイ(1)、ハクセキレイ(3)、セグ  
ロセキレイ(2)、モズ(1)、エナガ(10)、シジュウカ  
ラ(3)、メジロ(4)、ホオジロ、イカル(声)、スズメ、  
ハシボソガラス、ハシブトガラス。計20種 他  
タカ sp(2)。

天候には恵まれたが、冬鳥の渡来がなく、鳥影  
は寂しかった。鳥と木の実の関係を見たり、野  
鳥の名前当てゲームなどをしたが、参加者が少  
なかったのが残念だった。

#### ● 木曾岬干拓地探鳥会

(共催 愛知県野鳥保護連絡協議会)

2005年11月27日(日)

三重県木曾岬干拓地/愛知県鍋田干拓地

近藤義孝 村田芳雄 参加者14人

カイツブリ(30)、カワウ(3000)、ダイサギ(2)、  
アオサギ(2)、マガモ(6)、カルガモ(40)、コガ  
モ(300)、オカヨシガモ(18)、ハシビロガモ(1  
3)、ホシハジロ(3)、キンクロハジロ(1)、ミサゴ  
(7)、トビ(1)、オオタカ(1)、ハイタカ(1)、ノ  
スリ(1)、チュウヒ(3)、チョウゲンボウ(1)、キ  
ジ(3)、ケリ(10)、クサシギ(3)、イソシギ(2)、  
キジバト(5)、ヒバリ(10)、キセキレイ(1)、ハ  
クセキレイ(10)、タヒバリ(20)、ヒヨドリ(1  
0)、モズ(3)、ジョウビタキ(1)、ツグミ(6)、セッ  
カ(1)、カワラヒワ(16)、スズメ(80)、ムクド  
リ(85)、ハシボソガラス(100)、ハシブトガ  
ラス(20)、ドバト(70) 計38種

先月の探鳥会から冬の猛禽類が集まり始めてい  
た。干拓地整備事業の評価書がでると、埋め立  
てが始まる。今の姿の干拓地は年内しか見れな  
いかもしれない。猛禽類のためにここを残すこ  
とは我々のためになると思う。出来る範囲でが  
んばらねばと考える。

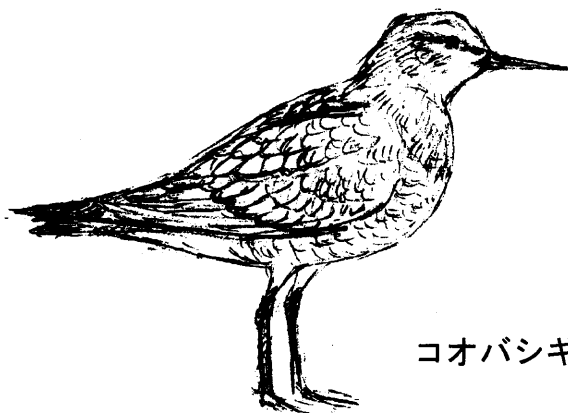
#### ● 伊賀地区の田園での探鳥会

2005年11月27日(日) 9:30-11:30

伊賀市比自岐

前澤昭彦 塗矢尋一 田中豊成 参加者18人  
(会員8人 会員外10人)

カワウ(1)、アオサギ(1)、カルガモ(22)、トビ(3)、  
ノスリ(2)、コチョウゲンボウ(3)、チョウゲンボウ



コオバシギ



## 探鳥会報告



(2)、ケリ (1)、キジバト (2)、カワセミ (1)、キセキレイ (1)、ハクセキレイ (3)、セグロセキレイ (2)、タヒバリ (1)、ヒヨドリ (5)、モズ (2)、ウグイス (1)、メジロ (1)、ホオジロ (2)、ホオアカ (1)、ムクドリ (130)、ハシボソガラス (3)、ハシブトガラス (6)、ドバト (12)。 計 24 種

お目当てのノスリが出た。初めから出るとは思わなかったが、皆さんが大喜びで長時間観察でき、とてもよかった。その直ぐあとチョウゲンボウが出て今日は幸先が良いと皆が声を揃えて言ってくれた。これだけゆっくり見られるとは嬉しい事です。

### ● 穴川探鳥会、交流会

2005年12月4日(日) 9:00-11:30

志摩郡磯部町穴川 エバーグレイス伊勢志摩キャンプ場

今村禎 中村みつ子 参加者 14人

(会員 12人 会員外 2人)

カイツブリ (3)、カワウ (94)、ダイサギ (3)、コサギ (2)、アオサギ (6)、マガモ、カルガモ、コガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミサゴ (2)、トビ (3)、ノスリ (1)、チョウゲンボウ (1)、オオパン (1)、イソシギ (1)、チュウシヤクシギ (3)、キジバト (1)、カワセミ (2)、ヒバリ (3)、セグロセキレイ (3)、タヒバリ (10+)、ヒヨドリ (2)、イソヒヨドリ (1)、ウグイス (4)、エナガ (10+)、メジロ (2)、アオジ (2)、カワラヒワ (10+)、スズメ (15+)、ハシボソガラス (2)、ドバト (5)。 計 36 種

天候に恵まれた探鳥会であったが、ここ数年同様、温暖化のためなのか冬鳥の代表のツグミが探鳥会では見られなかった。カモ類は9種類観察されたが、キャンプ場の埋め立てが進みカモ類の数は少なかった。途中でタカ(種類不明)の羽根が多数落ちており採集した。交流会は昨年同様焼ガキに全員満足でした。

### ● 安濃ダム探鳥会

2005年12月23日(金) 10:15-12:00

安芸郡芸濃町横山池に変更

平井正志・斉藤加代子 参加 16名 (会員 13名、会員外 3名)

カイツブリ、コガモ、オカヨシガモ、カルガモ、オナガガモ、タシギ、カワセミ、セグロセキレイ、ハクセキレイ、モズ、ヒヨドリ、メジロ(声のみ)、シジュウカラ、カシラダカ、ウグイス(声のみ)アオジ(声のみ)、ホオジロ、ムクドリ、カワラヒワ、ハシボソガラス

計 20 種 他タカ sp.

大雪で安濃ダムまで入ることができず、やむなく、横山池のみの探鳥会になった。また例年に比べ参加者も少なく、津周辺からの参加者のみであったが、これも雪の影響であろう。横山池は水が少なく、また鳥もあまり多くなかった。しかし、タシギが近くに現れ、地面に嘴を刺し込んでしきりに餌を採る様子が、じっくりと見え、面白かった。

### ● 木曾岬干拓地探鳥会

(共催 愛知県野鳥保護連絡協議会)

2005年12月25日(日)

近藤義孝 村田芳雄 参加者 32人

カイツブリ (5)、カワウ (600)、ダイサギ (5)、コサギ (5)、アオサギ (3)、マガモ (2)、カルガモ (100)、コガモ (150)、オカヨシガモ (30)、ハシビロガモ (12)、ホシハジロ (4)、キンクロハジロ (4)、スズガモ (1)、ミサゴ (5)、トビ (2)、オオタカ (3)、ノスリ (3)、ハイイロチュウヒ (1)、チュウヒ (3)、コチョウゲンボウ (1)、チョウゲンボウ (1)、キジ (7)、ケリ (2)、タゲリ (4)、クサシギ (3)、イソシギ (5)、オオセグロカモメ (1)、キジバト (6)、カワセミ (2)、ヒバリ (100)、ハクセキレイ (9)、セグロセキレイ (1)、タヒバリ (50)、ヒヨドリ (5)、モズ (2)、ジョウビタキ (1)、ツグミ (5)、ホオジロ (6)、カシラダカ (2)、アオジ (1)、カワラヒワ (6)、スズメ (500)、ムクドリ (10)、ハシボソガラス (200)、ハシブトガラス (20)、ドバト (60)。

計 46 種

参加者が32名と多かったが、出現した種数も46種と多かった。8種以上の猛禽類が身近に観察できる場所は鍋田・木曾岬以外にはほとんどない。ハイイロチュウヒもすぐ近くを飛んでいった。鳥の観察は農家には迷惑を掛けることもある。車の移動や駐車には地元の農家優先を忘れないようにしよう。



ハイイロチュウヒ



## 探鳥会報告

### ● 鈴の森公園探鳥会

2006年1月21日(土) 9:30-12:00

松阪市川井町 鈴の森公園、坂内川周辺

小津みゆき 谷口ひろ子 参加者12人(会員8人 会員外4人)

カイツブリ(2)、アオサギ(1)、コガモ(20)、ヒドリガモ(1)、パン(1)、クサシギ(2)、イソシギ(3)、タシギ(2)、ユリカモメ(100)、キジバト、カワセミ(1)、キセキレイ(1)、ハクセキレイ(5)、セグロセキレイ(3)、ヒヨドリ、モズ(1)、ジョウビタキ(2)、イソヒヨドリ(1)、ツグミ(1)、アオジ(3)、カワラヒワ(3)、シメ(1)、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ドバト。

計26種

天気予報は雪となっていて心配しましたが当日は風と寒さはありませんでしたが曇り空で終わりました。鳥の種類は例年と殆ど変わりませんが各種共数が少なく探すのに苦労しました。坂内川でカワセミが長い間ホバリングをみせてくれ、皆で楽しく見ることが出来ました。

### ● 木曾岬干拓地探鳥会

(共催 愛知県野鳥保護連絡協議会)

2006年1月22日(日)

三重県木曾岬干拓地/愛知県鍋田干拓地

近藤義孝 村田芳雄 参加者18人

カイツブリ(20)、カワウ(50)、ダイサギ(1)、アオサギ(2)、マガモ(3)、カルガモ(200)、コガモ(50)、オカヨシガモ(32)、ハシビロガモ(11)、ホシハジロ(6)、キンクロハジロ(4)、ミサゴ(4)、トビ(2)、オオタカ(2)、ハイタカ(2)、ノスリ(3)、チュウヒ(2)、ハヤブサ(1)、チョウゲンボウ(1)、キジ(15)、ケリ

(20)、タゲリ(10)、イソシギ(1)、オオセグロカモメ(1)、カモメ(3)、キジバト(6)、ヒバリ(10)、ハクセキレイ(4)、タヒバリ(2)、ヒヨドリ(6)、モズ(1)、ツグミ(6)、ホオジロ(4)、カワラヒワ(5)、スズメ(100)、ムクドリ(15)、ハシボソガラス(130)、ハシブトガラス(70)、ドバト(70)。

計39種

風も弱く、冬の探鳥会としては暖かだった。今回の目玉は、オオタカとチョウゲンボウの空中戦だった。また、ハヤブサがキジを襲うのもみんなで見ることができた。

### ● 旧青山町の冬鳥観察

2006年1月22日(日) 9:00-12:10

伊賀市上野城周辺に変更

小林達也 田中豊成 参加者8人

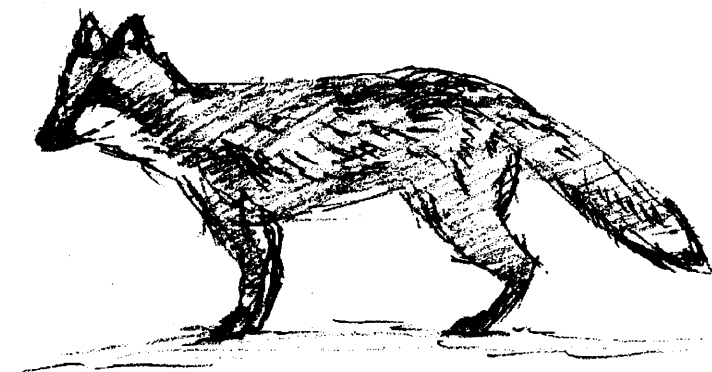
(会員8人 会員外0人)

カイツブリ(1)、カワウ(4)、コサギ(1)、アオサギ(1)、コハクチョウ(14)、マガモ(2)、トビ(1)、イカルチドリ(3)、タゲリ(6)、クサシギ(1)、タシギ(1)、キジバト(10)、カワセミ(2)、コゲラ(2)、キセキレイ(1)、ハクセキレイ(1)、セグロセキレイ(2)、ヒヨドリ(30)、モズ(1)、ルリビタキ(1)、シロハラ(1)、エナガ(5)、メジロ(5)、ホオジロ(20+)、アオジ(5)、カワラヒワ(20+)、スズメ(10)、ハシボソガラス(2)、ハシブトガラス(5)、ドバト(15)。

計30種

計画では旧青山川~大村神社の予定であったが前日の下見で出現鳥が少なく、当日参加者の了解を得て場所を変更したが30種が観察された。中でもコハクチョウ14羽は伊賀地区では珍しい。参加者全員が会員であり、非会員の方の参加が望まれる。

キツネ





三雲文化協会自然環境部主催

五主海岸探鳥会の報告

津市 橋本富三

以前に、旧三雲町（現在の松阪市）の雲出川河口（通称 五主海岸）で三重県支部主催の探鳥会に参加された地元の方から、五主海岸で三雲文化協会自然環境部主催の探鳥会を計画して欲しいとのご要望をうけ、3月11日（土）に実施したので報告します。

当日はお天気に恵まれ、暖かさも手伝って20名ほどの参加者があり、また地元ケーブルテレビの取材を受けました。

事前に用意した「日本の重要野鳥生息地のポスター」を使ってこの雲出川河口がその1箇所選ばれている事、「野鳥かみしばいのCD-ROM」からのプリントで、フィールドマナー、共存と循環のしくみ、野鳥の生態などを紹介、「鳥をみつけに」の小冊子、最近の「探鳥会のご案内のコピー」を参加者に配布し、野鳥を通して見える自然環境について理解を深めていただ

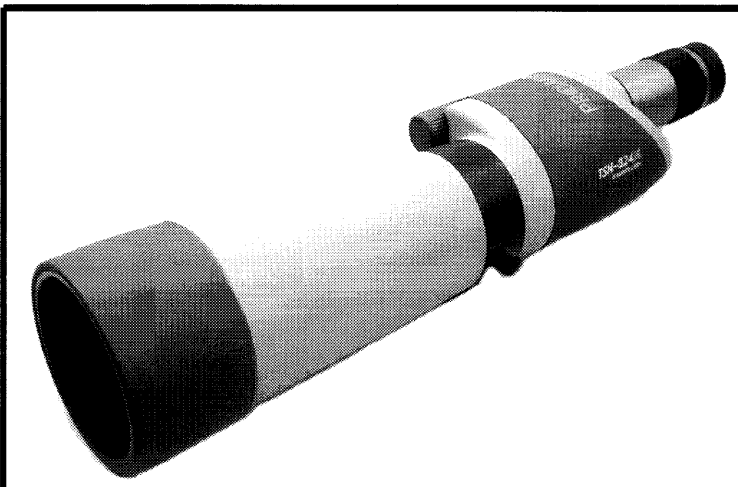
く事が出来たと思います。

その後、双眼鏡やスコープを使って、これから北へ旅立つカモ、シギ、チドリや、カモメ、サギ類を1時間ほど観察しました。中でも800羽を越えるハマシギの飛翔の美しさには、参加者から思わず感動のため息が漏れていました。

参加者の感想として、五主海岸が鳥達にとってかけがえのない大切な場所である事、愛知万博で何故オオタカが問題になったかが解った事、この感動、自然を守る大切さを子ども達に知ってもらうために小学生を対象にした探鳥会を計画して欲しいなどの嬉しいご意見を頂きました。

反省として、参加者の自己紹介や意見交流の場が持てなかった事、探鳥会の解散後にハヤブサが狩りに現れたのを参加者に見ただけなかった事などが心残りでしたが、思い出深い探鳥会になりました。

最後にこの探鳥会を企画していただいた三雲文化協会自然環境部の方々、観察のお手伝いをしていただいた野鳥の会の有志の皆様、本当にありがとうございました。



取扱商品

- フィールドスコープ
- 双眼鏡(小型・大型)
- 天体望遠鏡
- カメラ(新品・中古)
- その他光学製品各種

取扱メーカー

- KOWA・NIKON・FUJINON
- MIYAUCHI・VIXEN・PENTAX他

中部地区最大の光学製品専門店

**TELESCOPE CENTER EYEBELL**

テレスコープセンターアイベル (株式会社アイベル)

〒514-0801 津市船頭町3412(メガネのマスダ2F) TEL 059-228-4119

定休日/毎週水曜日 営業時間/10:00~19:00

ホームページ <http://www.eyebell.com> メールアドレス [eyebell@diamond.broba.cc](mailto:eyebell@diamond.broba.cc)



しろちどり  
津市内  
小坂里香（度会町）

アオバト  
大紀町内  
谷 貢（津市）



### 編集後記

「しろちどり」を発行し始めてからもう50号にもなった。

「野鳥を楽しむ会」と「自然保護の会」との両輪はたしかに難しい。しかし、次々と失われていく身近な自然を見て、やはり何かせねばと思う。この二兎を追うのもやむを得ないのかもしれない。いつも迷いながら休日をすごしていく。いやいや休日の次の日には仕事もあった。三兎を追っているのであった。(MH)

しろちどり 50号

2006年4月5日発行

題字： 濱田 稔

表紙絵： 杉原 豊

カット： 田中豊成・平井正志

編集： 平井正志 〒514-2325

津市安濃町田端上野910-49

発行所： 日本野鳥の会三重県支部

杉浦邦彦方

〒516-0026 伊勢市宇治浦田2丁目9-4

<http://www.amigo2.ne.jp/~miebirds/>